

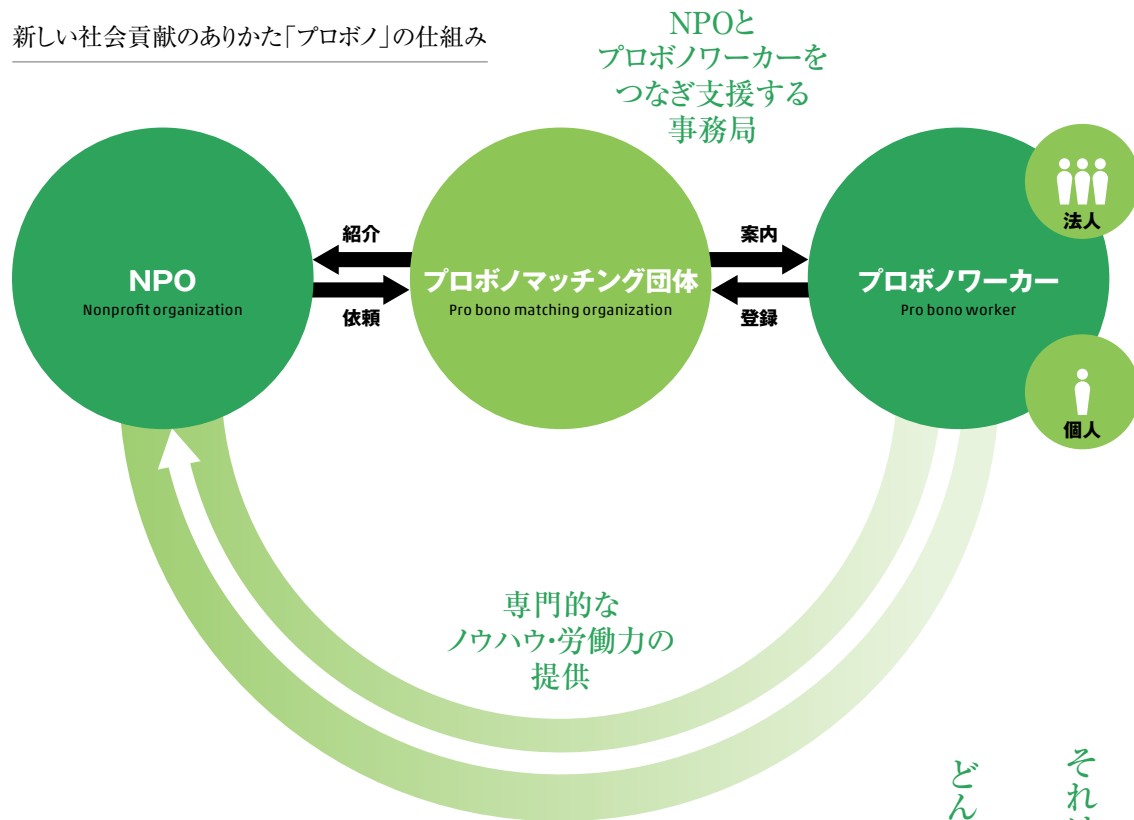
社会貢献の新しいかたち プロボノ

Special Feature / Beyond ON-OFF

Part

5

新しい社会貢献のありかた「プロボノ」の仕組み



「プロボノ」。それは、最近日本でも注目を浴び始めた新しい社会貢献の手法だ。いったいそれはどんな活動で、どんなやりがいを感じられるのだろうか。すでに実践している人たちの声を聴いてみよう。

取材執筆／野村麻里 撮影／名取和久

“pro bono publico”

「プロボノ」

社会的・公共的な目的のため、職業で培ったスキルや知識を提供するボランティア活動のこと。語源は、ラテン語の「公共善のために (pro bono publico)」に由来する。プロボノワーカーと呼ばれる提供者が、主にNPO団体へ向け、マーケティングや業務フロー作成、Web制作などで支援を行う。企業での取り組みも増えている。

「プロボノ」とは、その語源であるラテン語の「公共善のために (pro bono publico)」に由来する通り、社会的・公共的な目的のために、職業で培ったスキルや知識を提供するボランティア活動のこと。ボランティアを提供する先は、NPO団体である。

プロボノが従来のボランティアと違う点は、いくつかある。一般的なボランティアでは、職業やキャリアは問われないが、プロボノでは、プロフェッショナルなスキルが求められる。なぜなら、必要とされるのが、広報やマー

ケティング、事業戦略といった、相手方のNPO運営の根幹に関わる重要な役割だからだ。

もうひとつの違いは、ボランティア側（プロボノワーカーと呼ばれる）とNPOとの間をつなげる、もうひとつのNPOが存在する点である。このNPOが双方の状況を把握し、マッチングすることによってプロジェクトがスタートする。

アメリカから始まったというプロボノ。日本におけるプロボノマッチングのNPOで草分け的存在なのが、「サー

プロボノマッチング団体
サービスグラント代表

嵯峨生馬さん

日本のプロボノマッチングの草分け、NPO法人「サービスグラント」代表理事。日本総合研究所を経て現職。1974年生。



Seiga Ikema



Matsuda Naoko

プロボノワーカー

松田直子さん

個人プロボノワーカーとして、NPO法人「荒川クリーンエイド・フォーラム」営業資料作成支援プロジェクトに参加した。

ていることにも驚きました」

従来は、NPOに関わりたいたいというボランティアの人は多くても、運営や仕組みづくりまでを担う人は少なく、NPO運営の難しさを痛感していた嵯峨さんは、2005年に有志を募り、サービスクラントを立ち上げた。現在、登録しているプロボノワーカーは約1700人、NPOは約120団体に上る。

プロジェクトは、通常、チームで進められる。1チーム5、6人で、期間は約半年。チームのなかでプロジェクトマネージャーをひとり決め、マネージャーが全体のスケジュール調整や管理をする。各自は終業後や週末の時間を使って作業し、コミュニケーションにはメールやオンライン会議のツールが使われる。

誰もが スペシャリスト

大手電機メーカーに勤める松田直子さんは、もともとNPOの活動に強い興味があり、個人的にNPOのマネジメントの本を読んだり、NPOのマーケティング研修プログラムで学んだりしていたが、研修の際に知ったサービスクラントへ、2011年に登録。東京湾に注ぐ荒川の清掃を行うNPO法人「荒川クリーンエイド・フォーラム」の営業資料作成支援プロジェクトに参加した。

「私は営業職を長くやっていましたが、

自分を何かのスペシャリストだと思ったことはありませんでした。でも、プロジェクトでは、どこにどう営業すべきかなど、自分のノウハウがとても役に立った。嬉しかったです」

プロジェクトが終わった今も、プロボノワーカーのチームメンバーで、時々集まっては遊びに行く関係が続いている。プロボノは、自分が外の世界でどのくらい力があるかを知るチャンスという。

「なぜボランティアするの?と聞かれたら、タダで勉強できて役にも立てる。一石二鳥にも三鳥にもなるのよ、と答えています」

広がる企業の プロボノ活動

最近では、企業でチームを作りプロボノに参加するケースも増えている。日本マイクロソフト(株)もそのうちのひとつだ。不登校やひきこもり、中退などを経験した人向けの個別指導塾「NPO法人キズキ」の業務フロー設計プロジェクトには、社員の青木卓さん、市川和子さん、松山秀勝さんの3人が参

市川和子さん



Ichikawa Kazuko

加した。会社のプロボノ募集の説明会に応募した20〜30人のなかから青木さんがアカウントディレクターに選ばれ、彼が他のメンバーを選出した。

キズキでは、生徒の人数が増えるにつれ、書類の整理から金銭のやりとりまで、運営にあたっての煩雑な業務の把握ができなくなっていた。

「キズキさんの場合、学習塾といっても一般の塾とは事情が違いますよね。ですから、まずは私たちがキズキさんの業務を理解する必要があります。そして業務フロー設計を成果物にする」と決め、提案したのです(青木さん)

実際にフロー図を描いてみると、意外な問題が生じた。

「私たちは同僚ですから、ある程度同じやり方を共有していると思っていました。なのに、各自が担当したフロー図をつきあわせてみると、みんなバラバラ(笑)。お互いの認識を揃えるのに時間がかかってしまいましたね(市川さん)」

しかし結果的には、プロボノ活動で思いがけず社員の結束が高められることにもなったようだ。

そうしてできあがったフロー図につ

「業務フロー図作成では、業務を把握し理解を深めるため、何度も『NPOキズキ』に足を運び、ヒアリングを重ねました」

Matsuyama Hidekatsu



松山秀勝さん

「プロジェクトの期間中は、メンバー間でミーティングを週に一度。作業は終業後や週末時間を利用していました」

プロボノワーカー

いて、NPO法人キズキの代表、安田祐輔さんは、

「僕らのようにNPOを立ち上げる人間というのは、つい現場の支援にばかり目がいきがちなんです。実際に難しいのは運営の方なんです。今はフロー図ができたおかげで、何をすればいいのかがすぐにわかるようになりました。気がつかない間に楽になっている、そんな感じです」

と顔をほころばせる。

「私は将来、リタイアしたらボランティアをしようと思い、機会があるたびにいろいろなボランティアに参加しています。自分の特技を生かして支援できるなら、その方が受ける側にとってもいいと思いましたね。ボラン

プロボノで 社会が 変わる?!

プロボノは社会貢献のひとつには違いないが、与える側にも多くの成果を残すようだ。己のスキルの汎用性を知ることができる。職場以外のネットワークが広がる。相手方のNPOと協働することで、社会のさまざまなことへの問題意識が芽生える。社員同士の

安田祐輔さん



Yasuda Yusuke

支援を受けた「NPO法人キズキ」の代表。「フロー図のおかげでスタッフが共通認識を持て、業務が円滑になった」と喜ぶ。



Special Feature Part 5 / Document

フロー図を前に談笑するNPO代表とプロボノワーカー。制作には、マイクロソフト社製品の「エクセル」や「パワーポイント」が活躍したという。

青木 卓さん

アカウントディレクターとして日本マイクロソフト(株)のプロボノチームをまとめ、フロー図設計を提供した。

プロボノワーカー

Aoki Taku

